

員、帰郷し、男児三人、孫六人に恵まれ、老夫婦共に元氣です。

農業のかたわら名古屋鉄道のサービスマスターの管理人を引き受け、毎日を忙しく暮らしています。

それについても在支期間を通じて作戦、討伐、戦闘に明け暮れ、多数の戦友を失いましたが、不思議と無事に生き残っているこの身。とりわけ軍旗奉焼という特殊な空前絶後の記念行事に参加したことは、騎兵第三連隊関係者多数の代表者として、貴重な参戦体験による労苦を孫子の代まで永く語り伝えていきたいと思っています。

そして戦争の風化予防、祖国防衛の国家的最高機運の誘導等に老後の残された尊い時間を捧げたいとの念願いっぱいです。

## 中国四省三八〇〇キロを歩き戦う

愛知県 國立逸雄

昭和十八（一九四三）年四月一日、第一大隊第三中隊に入隊した時の私の家族は、父岩田久次郎、母よね、妹けい子の三人で、私は地元の織物会社に勤めていた。

私の入隊した名古屋第三師団歩兵第六連隊は、中国大陸中支の湖北、湖南、広西、貴州の四省を股にかけて、徒歩作戦に明け暮れた郷土部隊である。

波多野中隊長、若杉第三小隊長、安藤班長の初年兵教育を受け、軽機関銃射手を命ぜられ、小幡ヶ原演習場で鍛えられ、一期の検閲後の六月二十五日、下関で乗船、釜山、山海関、南京、漢口、広水を経て連隊本部のある浙河の町に着いたのが七月二十三日で、この間約一カ月の旅であった。

ここで第二期の検閲を受けるべく、訓練中の八月に

は初年兵として初の第一回作戦に参加、捕虜一人の戦果をあげ帰隊後警備に就いた。

十月十五日、常徳作戦が開始され、途中戦闘を交じえ一路常徳西部の桃源目指し、河あり湖ありの地帯を越え、常徳南岸から城内の敵陣に向けて攻撃した。この掃滅戦の最中に私は銃撃を受け、左足の脚絆がほどける程度の傷を受け負い、そのまま三日間我慢して戦ったが、中隊長から「岩田初年兵は、無理であるから後方に退去せよ」と命令され、口惜しくて涙が出た。

野戦病院に入院中、他隊の兵隊が私の傍らで熱い水筒を素手で持ったため、熱くて手を放し、熱湯が私の左耳に注がれるということがある、思わずその兵隊を殴りつけた。それが兵長だったので困ったが、軍医が駆け付け、重傷なので漢口第一病院に入院させられた。

その時、一選抜の上等兵は絶望的になったと残念でならなかった。一日も早く隊に戻りたくて治療に努め、昭和十九年三月初旬に退院となった。

二カ月後の昭和十九年五月、浙河を出発。二度と帰ることがないだろうと後ろを振り返りながら、湘桂作戦参加のため雨の中を崇陽に到着。第三中隊は前衛となり通城に向かったが、軍公路は寸断され、問道に入ると前方の小高い丘の森がある部落の様子がおかしいと進撃を続けたが、三時間過ぎても敵からの銃声がせず、山を登り、部落を通り過ぎんとした時に突如として、前方の台地からチェッコ機銃の掃射を受けた。

「あつ危ない！」、田の畦道を突っ走る。敵弾が前後左右の田に落ち水煙をあげる。各隊は右、左と散開し反撃に移り、そのうちに夜になった。寸刻を惜しんで飯を炊き腹ごしらえ。二十八日、東の空が白々と明けてきた。

はげ山の雑草に足をとられ、転んでは起き、ただひたすらに前進。小雨がシトシトと降っている。大きな川に出るが橋は破壊されており。水深は腹まである。禪一本で渡る。対岸に到着後、大休止。昼食をかつ込み、被服を乾かし、休む間もなく追撃前進する。

今夜も真っ暗。山路はすべる、田の中へドブんと落

ちる。互いに小声で「オイこっちだ、こっちだ」と呼び合う。先の者に誘導され、後の者を誘導しながら一歩、一歩と前進。夜明け頃、部落に入り大休止、すぐに炊飯、腹が減っては戦いに勝てんからなあと。いつ出発になるか分からないから、疲れていても泥水でも米を洗い飯炊きをした。

突然敵が反撃してきた。家屋周辺に迫撃砲弾が飛来。小騒な！直ちに出発、攻撃を開始。敵は小高い所からチェッコ銃をむちゃくちゃに乱射してくる。

友軍尖兵は一人、二人、三人と間をおいて畦道を突っ走り、そのうち大隊砲の砲撃、重機関銃が一連また一連と猛射。制圧されたか、チェッコ銃が鳴りを静めた。今の戦闘が全く嘘のような静けさだ。余程慌てたか、小銃やチェッコ銃弾が山路に散乱していた。

「おい戦友さん、今日はここで寝られるぞ、崇陽を出てからあまり寝てないな」と、鼻唄まじりに飯を炊きにかかると、急に出発命令。なんだ出発か、飯はまだ炊けてない半煮えだ。早速装具をまとめて出発。先程の鼻唄もどこへやら。

平江に通ずる前方で第二大隊と思われる隊が戦闘している。我々を追い越して第六中隊、続いて第七中隊が走って行く。我々第一大隊は、まだ戦闘参加の命令が来ないので道路で待機だ。

銃声も止み、ついウトウト寝入った。そのうち大休止の命令が出た。それ、半煮えの飯を炊け！急いで食事をしていいうちに休む間もなく進撃命令だ！また今夜も夜行軍か、眠たい、寝たい。ゴロリとひと眠りしたらどんなに楽だろう！と、居眠りしながらフラフラと歩いて行く。

六月一日、東の空が明けてきて、道の右側に小川があったたので顔を洗う。気持ちが良い、目が醒めた。古年兵が池に入り魚を捕る。大漁だ、たらふく食べる。夕刻出発、岐阜第六十八連隊の駄馬部隊と共になる。

六月二日、平江手前で豚や鶏を料理して昼食をとる。久しぶりの御馳走で大喜びしていたら、第三中隊は平江東南に前進の命令が来た。平江は既に攻略されていたが、市街は米軍機の爆撃でまだ燃えていた。

六月三、四日は付近の部落に宿営、久しぶりにぐつすり寝た。頭も軽い、休養を取って四日夕刻出発、次の目標瀏陽に向かい進撃する。

夜半を待って敵第二十軍を急襲する。夜明け間近に戦友達の情け無い姿を見て「オイ、お前の格好はなんだ」と笑ったが、「岩田も情け無いじゃないか」と笑い返された。山々と樹木の間には青空が見える。久しぶりにのどかなひとときであった。

突如、前から猛烈な射撃を受ける。「敵は兵力を増強したそうな」と古年兵がつぶやく。大隊砲、重機の掩護を受け、各個前進を始め、水田を駆けてゆく。朝からの戦闘は夕方まで続いた。夜行軍に移り大きな部落で大休止となった。

六、七日は出発命令はなく、八日も静かなもの。瀏陽攻撃の前祝いかと月を見る。兵馬しばしの休養の時に中国料理とチャンチューを飲み、薬の中でぐつすり寝た。

九日朝出発する。山田市付近には地雷原があり「注意」と標示がある。踏んだら一巻の終わりだ。十日、

瀏陽攻撃の火蓋が切られた。

第一大隊は左縦隊となり山路に入る。敵影なし。第三中隊は一の山、二の山と進み、正午頃、突如前方高地から猛烈な射撃を受ける。地形が悪い、畦道を走り死角から死角を縫って駆ける。一度は退却した敵も態勢を整え猛然と反撃に転じた。畦道を走り土橋を渡り、小川を越え山を登り部落をぬけて、一步一步を攻撃前進する。高地を稜線から稜線へと前進。攻撃の手をゆるめず、夕刻頃に敵の大部隊を発見するも、暗くなったので見失う。部落にたどり着き火を炊いたら、機関銃の乱射を受け、これに應戦撃退した。

六月十二日、早朝より山登り始まる。悪路の傍らにわき出る冷たい清水で喉を潤し、重い足をひきずり、一步一步頂上に到る。午後敵弾により兵隊一人と使用苦力二人が死亡した。

十三日、前方の山の中腹に敗走する敵を見る。尖兵第三中隊は先頭に、各中隊も高地に攻撃前進占領するが、第二中隊長が負傷されたと聞く。

十四日未明出発、今日は瀏陽突入と聞き身震いす

る。北河岸に街が見える。中隊は雪崩を打って街へ突入。第三中隊に続いて本隊も突入した。

この頃、第一大隊長北田大尉は病気が重く入院され、第三中隊長波多野大尉が代理となる。十八日、杜巷市北側で第三中隊伊藤少尉が狙撃兵に狙われ、頭部貫通銃創を受け即死された。

七月十九日、次の目標、安源の北にある車水橋の戦闘では、第一中隊、第三中隊が多く、の戦死者を出したので、松山連隊長が大隊本部に来て戦闘状況を聞かれた。夕刻やっと安源に着く。この町は石炭の産地で鉄道があった。湖南省に入ると、日中の炎熱は行軍に耐えられぬほど暑い。

二十八日正午、攸県に通ずる軍公路で小休止の時に突然、ノースアメリカン二機が現れ二〇ミリ機関砲を掃射して飛び去った。

八月十二日、今まで全く姿を見せなかった友軍機十二機が日の丸を赤く鮮やかに見せて飛んできたではないか。「パンザイ、パンザイ」と手を振り、足を踏み布を振り声を張り上げた。涙が止めどなく流れ落ち

た。

八月十三日、桂林に近づくにつれ、対戦車戦に備えて破甲爆雷で攻撃する噂が広がったが、進軍するうちに忘れ去られた。

その後、広西省に入り、桂林でなく柳州を目標に進撃する。岩山また岩山で、今まで見たことのない奇妙な形の岩山にびっくりする。我々の服装が惨めなため、中国軍と間違えられ住民が迎えてくれたこともあった。また、ある時は、山中の夜行軍で第一大隊の進撃が早過ぎて、我が第三中隊が中国軍と間違えられ、付近の部落から続々と住民が手を振ってそばまで寄って来て、はじめて日本軍と気付き、慌てふためいて逃げ出す始末で、その早さに司令部でも驚いていたそうだ。

来陽県を出発して約二十五日間行軍の末、ある城内に入り、野菜、豚を材料に夕食を作り「食わなきや損々」とばかり腹いっぱい食い、また、甚だ甘いぜんざいもガブガブ飲み、横になると南京虫に食われ、一日散に逃げ出す始末。

古年兵が明日は平楽攻略だと言う。山また山を通り平楽前方に行くと、既に敵影は無く、昨日逃亡したそ  
うだ。第三中隊に渡河（珠江）準備の命下る。

船に乗るも下流に流される。浅瀬に乗り上げたので  
「一、二、三」と飛び降り河原を突っ走り、敵陣の台  
地へとまっしぐらに突進すると、敵は陣地を捨てて逃  
走した。翌日には全部隊が渡河した。

またもや山ばかりで、柳州を目指す。やがて桂林と  
柳州を結ぶ桂柳公路に出たが、前進困難なため、修仁  
に設営一泊する。翌朝、偽装して前進、鉄道が南北に  
走っている。兵隊は汽車に乗りたいと思う。柳州は目  
前だ。第一大隊は師団直轄となり、突入は夢となり残  
念でならない。

柳州近くの道路や線路上に、多くの土民や中国兵の  
死体がゴロゴロ、蠅が真っ黒にたかり死臭がプンプン  
鼻をつく。

遷江渡河点付近の軍公路を進撃中、突如敵の掃射を  
受けて、田口軍曹が胸部貫通銃創で戦死（十一月十  
日）された。頑強な敵陣を奪取すべく大隊砲が火を噴

き、重軽機も一斉に射出して一刻後、「射撃中止」の  
合図に白布を振り、「突撃に突っ込め」と小関小隊長  
は軍刀を抜き先頭に立ち前進中、胸に敵弾を受け倒れ  
た。当番兵の「小隊長がやられた。衛生兵前へ！」の  
声に、救護に駆けつける衛生兵が途中、大腿部に被弾  
戦死した。

柳州攻略後、西北に転進。十一月二十日宜山、十一  
月二十六日宜北、伸地、水岩、三合と重慶に通ずる道  
を北進した時に、十七年徵集兵以上の兵に反転命令が  
出され、八塞、都勾まで行って、十二月三日、今まで  
来た道を南進することになった。

反転中、所々で戦闘が展開され、高地から手榴弾が  
赤い火を噴いて轟音と共に火花が散る。第三中隊は突  
撃する。昨夜から一粒の飯も食べていない。その時、  
握り飯が届き、天の助けと無我夢中でかぶりつく。元  
気を取り戻した隊は一丸となって敵陣に飛び込む。押  
しに押して力攻に力攻を重ね、肉弾を繰り返した。暗  
くなりかけた頃、ようやく前面の敵を西方に敗走さ  
せ、左側高地を占領した。

この戦いで尾関少尉、日比曹長、出口伍長が負傷した。日没と共に河を渡り北岸に達し、後衛部隊は我が第一大隊であった。

遷江から柳州へ向けて北進。大塘墟では連隊本部、第三中隊、第三小隊は苦戦。第一大隊長江口中尉の声が聞こえる。大隊長は必死である。敵を撃破せんと前に走り後に走り、あるいは横に飛び指揮をとっている。我々兵隊も中尉のこんなに敵しい顔は、今まで見たことはない。機関銃中隊長の頃は第三小隊に來られてはチャンチューを飲まれて、丸い顔がニッコリされて良い顔だった。

十二月二十日、南柳州に到着。柳州は米空軍機によって市内全域が焼き払われていた。北部柳州は焼かれていないが、和平街以外は住民がいない。和平街は商いをしているが物価が高い。儲備券が発行されて価値が下がって、紙幣というより紙屑同然だ。住民の営みは生き生きと見えるが上べだけ、「没法子（仕方ない）」と諦めているのが顔に表れている。

一泊の休養があるかもと期待したが、夕方に出発の

命令がくる。公路または鉄道線路を歩み続け、夕刻出発、夜行軍と敵機におびえ敵襲に遭い、三日から五日連続して歩き一日休養する、このパターンの連続だった。大隊の後ろについてくる中国人が二〜三百人もいるのに驚いた。広東人が多い。

大寨鎮で糧秣を受ける。途中、鉄道橋が破壊されているのでザブザブと渡るが、流れが速く足を取られ危うく倒れそうになる。大きな町に入ると宣撫が行き届いているので野菜が調達できる。永福と桂林間敵機が來襲する。夕刻出発、岩山が多い桂林飛行場を通り、北漢東村に着き大休止、設営する。

チラチラ見える桂林城外の街を通り市内に入る、大きな街だ。約一年前までは米空軍基地であった。過ぎし当時の状況を思い、桂林の街を通り過ぎていく。共に進撃して桂林を見ることが出来なかった戦友たちも少なくない。一目でよいから桂林を見せてやりたかった。

明日の朝は全県だ、糧秣受領が楽しみだ。東南に青い山脈が見える。広西、湖南の省境の山だと思う。行

軍は続き湖南省に入り零陵まで苦難の行軍であった。

敵機が来る、慌てて橋の下に逃げ込む始末、全く口惜しい。もうすぐ衡陽だ。被服・甘味品の交付があるらしい。かつての我等の波多野中隊長が、自動車輸送中に敵の待ち伏せに遭い、無念の最期を遂げられた地点が近い。また敵機の爆音がする。照明弾が投下され夜空が明るくなったと同時に、ドカンドカンと猛烈な音が聞こえて来る。

八月初め衡陽郊外に着く。通訳の中国人と別れる。この時彼は日本の敗戦を知っていたようだ。二泊三日の休養をここで取る。

道路沿いの民家の明かりがともし、姑娘が店番をしている。美しい姑娘であるのでわざわざ顔を見にゆく奴もいる。城内は砲撃と爆撃でメチャクチャに破壊されている。

長沙に着いたが外出禁止の命令がくる。宿営地には菓子、飴、マントウを売りにくるが品物を見るだけだ。

今日は何日だろうか？ 誰かが八月十二日頃と言

う。夕方出発、岳州に向かう。岳州では二泊ぐらいの休養があるだろうと思いい、洞庭湖の傍らを通り、五里舗に着き糧秣受領に行く。

八月十五日、苦力達が「シイサン、日本降伏した」と言う。苦力の流言飛語に惑わされぬとは言え、一日中不安にかられる。早く真実を知りたい。以後の心構えもある。十七日出発途中、警備隊の分哨があり、古年兵（十四年兵分隊長）が聞いても分からない。岡田大隊長が真偽を聞きに行かれ敗戦が確認されガクンとくる。力がスーッと抜ける。中隊長より訓示があり、一同ショックで声なく無念の涙を流す。

「祖国敗れたり」、貴州の山険に挑み、仏印国境まで進撃しても無駄だったかと思いをはせる。

部隊は一路九江へと行軍する。更に安慶へと行軍、揚子江を舟で鎮江に着き、ここで武装解除となる。第三中隊の一部は象山に行き暫壕掘りをする。

明けて二十一年三月に内地帰還の報あり、上海旧市



政府に集結するも、他大隊で赤痢患者が発生し、約一カ月間待機、呉湊港のある紡績工場に行く。ここでまた一カ月過ごし、呉湊を出発し上海港に着く。三月七日に乗船し八日博多上陸。三月十一日故郷津島の自宅に帰る。

昭和十八年四月から昭和二十一年三月までの約三年間の軍隊生活は、ここに敗戦を以って終った。

新兵四十二人が第三中隊に入ったが、無事帰国出来た者はわずか十人しかない。第三中隊が浙河を出発した時の人員百六十人、戦死二十三人、戦傷病死者五十七人、行方不明七人、計八十七人。二分の一以上が死んでいる。

## 家族を残して満・支での戦務

栃木県 笹沼 玉三郎

大正十一（一九二二）年三月十七日、現在の矢板市で父辰吉、母ミエの三男として生まれました。父は石

工をしていたので、家業の農事は母を助けて精励しつつも郷校を卒業、傍ら戦時下の青年学校に通い、軍事教育を受けつつ心身を鍛錬し、来るべき出征の日に備えていました。また、青年団、消防団にも入団し、交友と銃後の支援活動に従事中の昭和十七（一九四二）年の徴兵検査で、身長一六三センチ、体重六〇キロで甲種合格でした。

父は大正元年兵で、宇都宮の歩兵第五十九連隊第三中隊に入り軍務に励んでいた体験がありますし、なかなかの暴れん坊であつたらしく、軍隊のことについては日々話を聞き、それが入営後にも大要役立つと思えます。

昭和十八年三月一日、福島県の会津若松の歩兵第二十四連隊に入営となりましたが、その連隊は留守隊というか、補充隊であつたのでしょうか。昭和十八年の初期というとだんだんに緒戦の「戦勝、戦勝」の時とは違い、連合軍の攻勢も盛んとなったのか、制空・制海権は敵に握られつつあつたようです。しかし、初年兵たる我々には戦争の大勢など知る由もありませんでし